

加茂岩倉遺跡発掘調査概報 II

1998年3月

加茂町教育委員会

加茂岩倉遺跡発掘調査概報 II



加茂岩倉遺跡の位置

1998年3月

加茂町教育委員会



遺跡西側上空より谷を望む

序

39個もの大量の銅鐸が発見され、静寂を保っていた岩倉の谷が、一変して多くの人々に埋め尽くされた衝撃の日から、早くも1年半の歳月が流れようとしております。

この間、加茂岩倉遺跡では、昨年度に引き続いだ第2次の発掘調査を実施し、その結果、銅鐸埋納坑に類似した第2の土坑が発見されるなど、銅鐸埋納を考える上で貴重な成果を得ることができました。

一方、今年度には、東京・島根・大阪を巡回する出雲古代文化展が開催され、加茂岩倉の銅鐸をはじめとする古代出雲の文化遺産に、全国各地から訪れた45万人もの来場者が魅了されたことは記憶に新しいところです。また、このことは、青銅器文化の里に住む私たちにとって、あらためて大いなる夢と誇りを与えてくれました。

銅鐸の詳細な調査を含め、加茂岩倉遺跡についての研究は、まだ緒についたばかりであり、今後、地域に根ざした地道な調査・研究を進めて行くこともこれから課題として残されています。また、我がまちにとって、先人の残してくれた、この貴重な文化遺産を守り、正しく後世に伝え活用していくためにも、自然景観と調和のとれた遺跡の整備や、住民の学習の場としての銅鐸保存・展示施設の整備を実現することが是非とも必要であると考えております。

このように、私たちが果たすべき課題は非常に大きなものですが、「銅鐸のまち 加茂」という誇りを胸に、住民が一丸となって、文化財を活かしたまちづくりを実践していく所存であります。

最後になりましたが、銅鐸の発見から終始多大なるご指導・ご協力を賜りました文化庁、奈良国立文化財研究所、島根県教育委員会をはじめ、関係諸機関及び諸氏に対しまして心より厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

加茂町教育委員会

教育長 土江博昭

例　　言

1. 本書は、加茂町教育委員会が平成9年度国庫補助事業として実施した鳥根県大原郡加茂町加茂岩倉遺跡発掘調査の概報である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 加茂町教育委員会

事務局 速水雄一（加茂町長）、矢内高太郎（加茂町役員）、土江博昭（加茂町教育委員会教育長）、岸本邦夫（同教育次長）、杉原顯道（同社会教育指導員）

調査員 吾郷和宏（加茂町教育委員会社会教育主事）

調査補助員 北島人輔（明治大学院生）

調査参加 落部未知架、鎌織敬夫、中林明正、庄司陽吉、三島勲、松浦孝夫、多田納富栄、常松孝基、三島昌子、小島裕美、永瀬邦枝

調査指導 文化庁記念物課、井上洋一（東京国立博物館考古課主任研究官）、岩永省三（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官）、小田富士雄（福岡大学人文学部教授）、久野雄一郎（奈良県橿原考古学研究所指導研究員）、近藤喬一（山口大学人文学部教授）、佐原真（国立歴史民俗博物館館長）、沢田正昭（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財調査センター研究指導部長）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、難波洋三（京都国立博物館考古室長）、速水保孝（元鳥根県立図書館長・古代史研究家）春成秀爾（国立歴史民俗博物館教授）、町田章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長・島根県文化財保護審議会委員）、森浩一（同志社大学文学部教授）、山内靖喜（島根大学総合理工学部教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）

3. 発掘調査に際しては、土地所有者の方々、地元岩倉自治会など終始多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

4. 発掘調査に際しては、下記のとおり各分野に依頼して行った。

遺構写真測量—アジア航測㈱、放射性炭素年代測定—㈱地球科学研究所、埋め戻し工事—㈲荒木建設

5. 捜査中の方位は、国十調査法による第III座標系の軸方位である。

6. 本書に掲載した遺跡の分布図は建設省国土地理院発行のものを、調査区配置図は加茂町農林課が作成したものを使用した。

7. 本書の執筆、編集は吾郷が行った。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・図版目次

| | |
|----------------|----|
| 第1章 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| 第2章 位置と歴史的環境 | 4 |
| 第3章 調査の概要 | 7 |
| 1. 銅鐸埋納坑周辺の調査 | 7 |
| 2. 丘陵上の調査 | 13 |
| 第4章 まとめ | 17 |

挿 図 目 次

| | | | |
|-----------------|----|-------------------|----|
| 第1図 銅鐸の発見状況 | 1 | 第8図 土坑（SK2）上層図 | 11 |
| 第2図 古代出雲文化展 | 2 | 第9図 上坑（SK3）実測図 | 12 |
| 第3図 加茂岩倉遺跡周辺の地形 | 3 | 第10図 第3郭土層図 | 13 |
| 第4図 加茂岩倉遺跡とその周辺 | 5 | 第11図 第3・4郭地形測量図 | 14 |
| 第5図 出雲地域の主要遺跡 | 6 | 第12図 出土上器実測図 | 15 |
| 第6図 造構配置図 | 9 | 第13図 土坑（SK4・5）実測図 | 16 |
| 第7図 土坑（SK2）実測図 | 10 | | |

図 版 目 次

| | | | |
|-------|--------------|--------|------------------|
| 巻頭図版 | 遺跡西側上空より谷を望む | 図版6-1 | 土坑（SK3）土層断面 |
| 図版1-1 | 大岩 | 図版6-2 | 土坑（SK3） |
| 図版1-2 | 櫛現（矢檀神社跡）の大岩 | 図版7-1 | 丘陵上調査前 |
| 図版2-1 | 遺跡近景 | 図版7-2 | 丘陵上トレンチ |
| 図版2-2 | 造構全景 | 図版8-1 | 落とし穴状土坑（SK4）土層断面 |
| 図版3-1 | 土坑（SK2）周辺調査前 | 図版8-2 | 落とし穴状土坑（SK4） |
| 図版3-2 | 土坑（SK2）周辺調査後 | 図版9-1 | 土器出土状況 |
| 図版4-1 | 土坑（SK2）調査前 | 図版9-2 | 出土上器 |
| 図版4-2 | 土坑（SK2）調査後 | 図版10-1 | 埋土試験採取 |
| 図版5-1 | 土坑（SK2）土層断面 | 図版10-2 | 現地説明会 |
| 図版5-2 | 土坑（SK2）上層断面 | | |

第1章 調査に至る経緯と経過

加茂岩倉遺跡は、平成8年（1996）10月14日、加茂町ふるさと農道整備事業大竹岩倉地区農道整備工事の工事中、偶然に大量の銅鐸が出土したことにより発見された（第1図）。工事で掘り出された銅鐸には、重機により大破したものや吊り手が欠損したものもあったが、半分以上は完形であり、確認された銅鐸の数は全国最多数の31個を数えた。その後の調査により、この数はそれまでの最多出土である滋賀県野洲町大岩山遺跡の24個を大幅に上回る39個となった。

平成8年度の発掘調査⁽¹⁾では、銅鐸埋納坑（SK1）の一部と埋納坑内に原位置を保つ入れ子の状態で納められた2組4個の銅鐸と埋納の痕跡をとどめる銅鐸の圧痕3ヶ所を検出した。これらの状況から、身を横たえ、鰭を上下あるいは斜めに立てていること、殊に上方の鰭を水平にして据えられていることが確認された。そして、銅鐸が密集した状態で配列されていたと想定すると、埋納面積が2×1m程度であることも推定できた。その他の遺構として、銅鐸埋納坑の隣り3mの地点で土坑（SK2）を検出したが、調査用覆屋の支柱をこの土坑上に設置していたため、限られた範囲しか調査ができず今年度に持ち越した。また、工事により丘陵斜面を覆っていた排土を除去して元の丘陵地形の検出と銅鐸破片等を採取するために排土の振るいがけ作業を行ない、百数十点の破片を採取したが、予想以上の土砂量であったため3割程度の排土が残った。

今年度の発掘調査は、土坑（SK2）など遺構部分の調査、丘陵斜面を覆っている排土の除去と振るいがけ作業を5月12日から始めた。7月4日には排土調査を完了したが、昨年度の排土調査で銅鐸が転落したと思われるところはほとんど除去し終えていたため、今年度は斜面の排土からは破片の回収はなく、唯一、土坑（SK2）上の攪乱土中から破片1片を採取した。

土坑（SK2）部分の調査は、昨年度の測量基準点をそのまま用い、土層観察用の畦を設定して、まず重機によって攪乱した土砂の除去をし、土坑の輪郭の検出を行なった。重機により標高138m前後の高さまで水平に削られ、土坑の北辺や西北部分は重機によって地山の花崗岩風化土がかなり深く掘り込まれた箇所もあった。そのため、当初は土坑の北西部分は別の土坑かとも見られたが、土層観察をしながら埋土を掘り進めた結果、銅鐸埋納坑と同じようにオーバーハング状の掘り方をしていること



第1図 銅鐸の発見状況（平成8年）

が確認され、北西側の部分はオーバーハングの天井部分の地山が重機により削り取られた跡であり、同一の土坑であることが判明した。重機による擾乱は坑の底面まで及んでいなかったため、坑の規模はほぼ確認できた。土坑内の埋土は土壤をサンプリングしながら掘り進めた。埋土内には豆粒大の木炭が散在してみられたので、この木炭と昨年度の調査で埋納坑外南側で採取された木炭については¹⁴C年代測定を委託して調査した。また、埋土はサンドイッチ状の互層となっていたが、記録のために畦壁面の上層は剥ぎ取りを行い、保存のため畦内の発掘は行なわずにそのまま残した。その他の遺構としては、銅鐸埋納坑の南西1.6mに土坑（SK3）を検出したが、重機によりかなり擾乱を受けていた。また、土坑（SK2）周辺にいくつか小ピットが検出されたが、穴の形状も不整形であり、柱穴等その性格を決定できる状況ではなかった。8月30日、埋め戻していた銅鐸埋納坑を再び掘り上げて遺構部分全体の写真測量を行い、遺構およびその周辺の調査を終えた。銅鐸埋納坑と土坑内は砂で埋め戻したうえに土嚢により埋め戻しを行った。

銅鐸出土上方の丘陵上については、踏査により尾根上に人工的な平坦面がみられたことから、雑木の伐採、地形測量を行った後、トレンチによる試掘調査を11月6日から12月25日の間実施した。ここでは、中世の山城跡と思われる郭遺構を確認し、土師質土器が出土した。他に、落とし穴と思われる遺構も検出されたが、銅鐸の埋納と関連すると思われる遺構については確認することができなかった。

銅鐸の調査については、平成8年度の調査により、入れ子関係、銅鐸の型式・文様、同範関係、絵画や「×」の刻線、鈎掛けや補刻、鑄の刻みなどが確認された。今年度は「古代出雲文化展」へ出品のため調査は一時休止

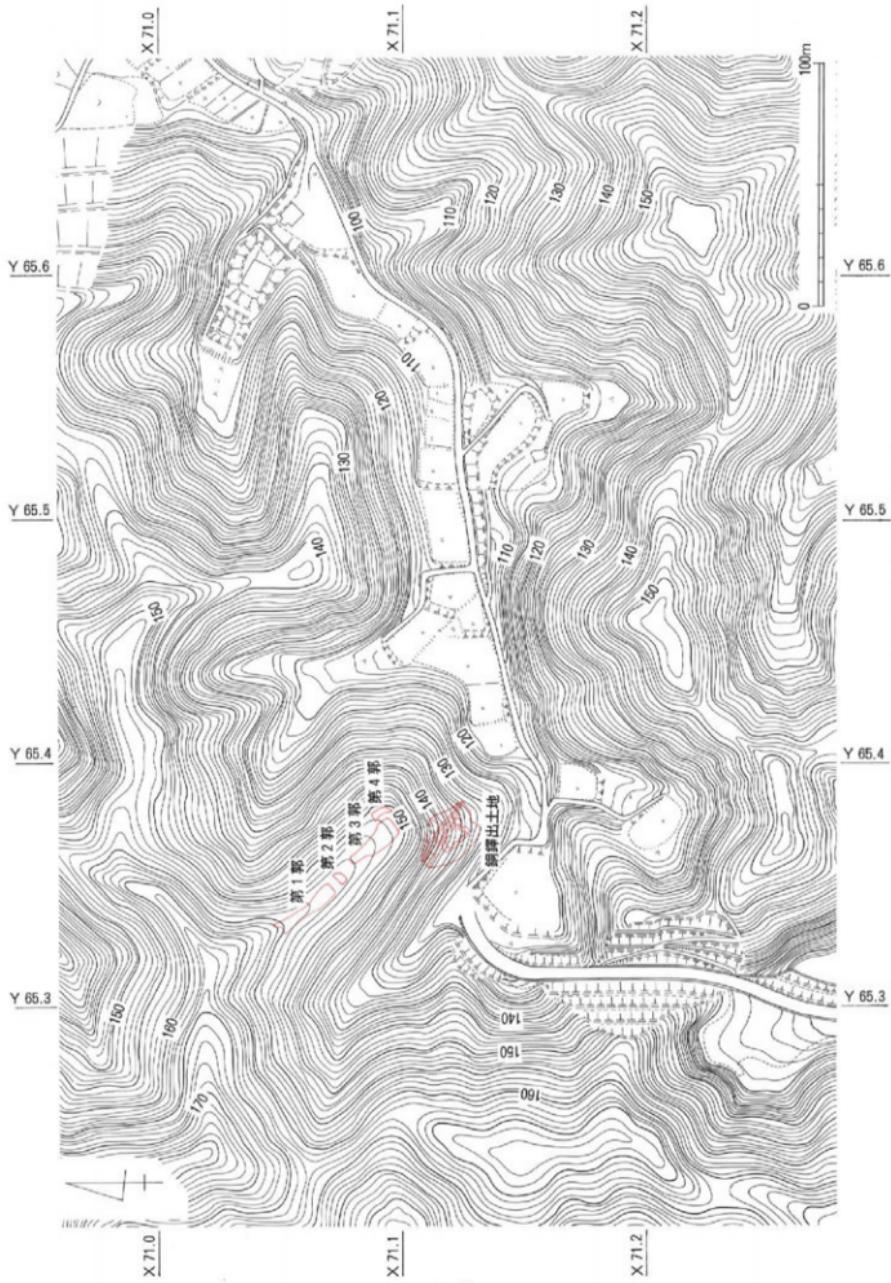
となつたが、東京、鳥根、大阪の3会場には加茂岩倉銅鐸をはじめとする古代出雲の文化遺産を一目見ようと当初の予想を上回る延45万人の人々が訪れ大盛況を博した（第2図）。銅鐸の実測など本格的な銅鐸調査は来年度以降実施の予定である。



第2図 古代出雲文化展（島根会場）

（1）加茂町教育委員会『加茂岩倉遺跡発掘調査概報Ⅰ』1997

第3図 加茂岩倉遺跡周辺の地形 ($S = 1 : 2000$)



第2章 位置と歴史的環境

加茂岩倉遺跡は島根県大原郡加茂町大字岩倉字南ヶ廻に所在する。加茂町は斐伊川支流の赤川が東西に流れ、東西 6.4 km、南北 6.8 km とほぼ四角形の四隅を山に囲まれた盆地状の地形を呈する。遺跡は町の中央から国道に沿って北に赤川支流の猪尾川を測り、途中から西へ岩倉本郷の谷を流れる岩倉川を約 1.7 km 入った幅 20 m ほどの狭長な谷の最奥部にある（第4図）。銅鐸は山頂から少し下がった南向きの丘陵斜面中腹に埋納されていた。標高は約 138 m、谷底からの比高は約 18 m あり、見上げるような高さの急な斜面に立地するが、ここからの眺望は良くない（第3図）。

町内の主要な遺跡としては（第4図）、加茂岩倉遺跡から南東 1.8 km の赤川南岸に、出雲地方最古級の前期古墳として知られる神原神社古墳がある。長さ 5.8 km の狭長な堅穴式石室を主体とする一辺 30 m ほどの方墳で、卑弥呼が魏土から下賜されたとされる景初三年銘三角縁神獸鏡や武器、農工具などの多数の鉄製品が副葬されていた。また、神原神社古墳の背後の丘陵には弥生時代後期から古墳時代にかけての小規模な墳墓・古墳が集中する神原正面遺跡群が存在する。一方、古代の集落遺跡は現在までのところ発見されていないが、これらの被葬者の居住域は現在の神原集落が立地する赤川沿いの微高地ではないかと推定されている。

この神原という地名については、奈良時代の天平 5 年（733）に編纂された『出雲国風土記』大原郡神原郷の条に「所造天下大神の神御財積み置き給ひし処なれば、神財郷と謂ふべきを、今の人猶誤りて神原郷と云ふのみ」との地名の由来が記述される。現在の加茂町は大原郡神原郷と屋代郷にあたり、岩倉地区は屋代郷に比定、遺跡は神原郷との境にあたる場所に位置する。また、岩倉という地名は神が降臨する依り代である「磐座」に通じるとされるが、岩倉地内の岩倉大山周辺には巨岩が散在する。遺跡から数百 m 離れた谷入口の対岸丘陵には、1717（享保 2）年の『雲陽誌』に記載され、岩倉の地名の所以になったと伝えられる大岩や巨石を祀った権現（矢櫃神社跡）がある（第4図）。「青銅器埋納」と「巨岩祭祀」そして「地名」や「伝承」との関係など興味がもたらるところである。なお、岩倉地区には古墳時代後期の横穴墓、中世の山城跡などが若干知られる程度で遺跡の希薄な地域であった。

次に、弥生時代の出雲地方を概観すると（第5図）、青銅器出土地では、遺跡の北に位置する大黒山、高瀬山からなる山々を挟んでわずか北西 3.4 km に神庭荒神谷遺跡（簸川郡斐川町）が所在する。昭和 59 年（1984）、これまでの銅劍出土総数を上回る 358 本の銅劍が出土し、翌年にも銅劍出土地からわずか東へ 7 m の地点で、銅鐸 6 個と銅矛 16 本が同じ埋納坑から出土した。また、昭和 48 年（1973）に銅鐸 2 個と銅劍 6 本が共伴出土した志谷奥遺跡（八束郡鹿島町）、寛文 5 年（1665）に命主神社背後の大石の下から銅戈と硬玉製勾玉が出土したと伝えられる真名井遺跡（簸川郡大社町）が知られ、平成 9 年（1997）には西川津遺跡（松江市）からも銅鐸の破片が出土している。その他に出土地は確定できないが伝えられているものとして、平浜八幡宮蔵銅劍出土地（推定地：松江市）、横田八幡宮蔵銅劍出土地（推定地：仁多郡横田町）、伝熊野山上銅鐸（八束郡八雲村）、伝木次町出土銅鐸（大原郡木次町）、伝鳥根県出土銅鐸（八束郡宍道町、八雲本陣記念財団蔵）が知

られる。弥生時代の集落遺跡は出雲平野に数多く見られる。旧斐伊川と神戸川の堆積作用によってできた川沿いの自然堤防上につくられた集落で、原山遺跡（簸川郡大社町）、矢野遺跡、天神遺跡、古志木郷遺跡（山雲市）などの拠点的な大集落が知られ、天神遺跡や正蓮寺周辺遺跡（出雲市）では弥生時代後期に環濠を巡らしていたことが明らかになっている。

一方、弥生時代後期には、四隅突出型埴丘墓6基以上を含む西谷墳墓群（出雲市）が斐伊川下流西岸の丘陵上に築造される。この中には3号墓など一辯40mを越える大型のものもあり、また、墓塚上の供獻土器の中には吉備系の特殊土器や北陸系統とも考えられる土器が出土し、吉備地域等との交流関係が注目される。また、古墳時代前期の古墳としては、出雲平野では北山南麓にある全長50mの前方後円墳の大寺古墳や神西湖の東方にある山地古墳（出雲市）が知られ、斐伊川中流域では神原神社古墳の他に前方後方墳の松本1号墳・3号墳（飯石郡三刀屋町）と斐伊中山2号墳（大原郡木次町）が知られている。

（参考文献）

加茂町『加茂町誌』1984

加藤義成『修訂出雲國風土記参究』1981

島根県古代文化センター編『荒神谷遺跡と青銅器』1995

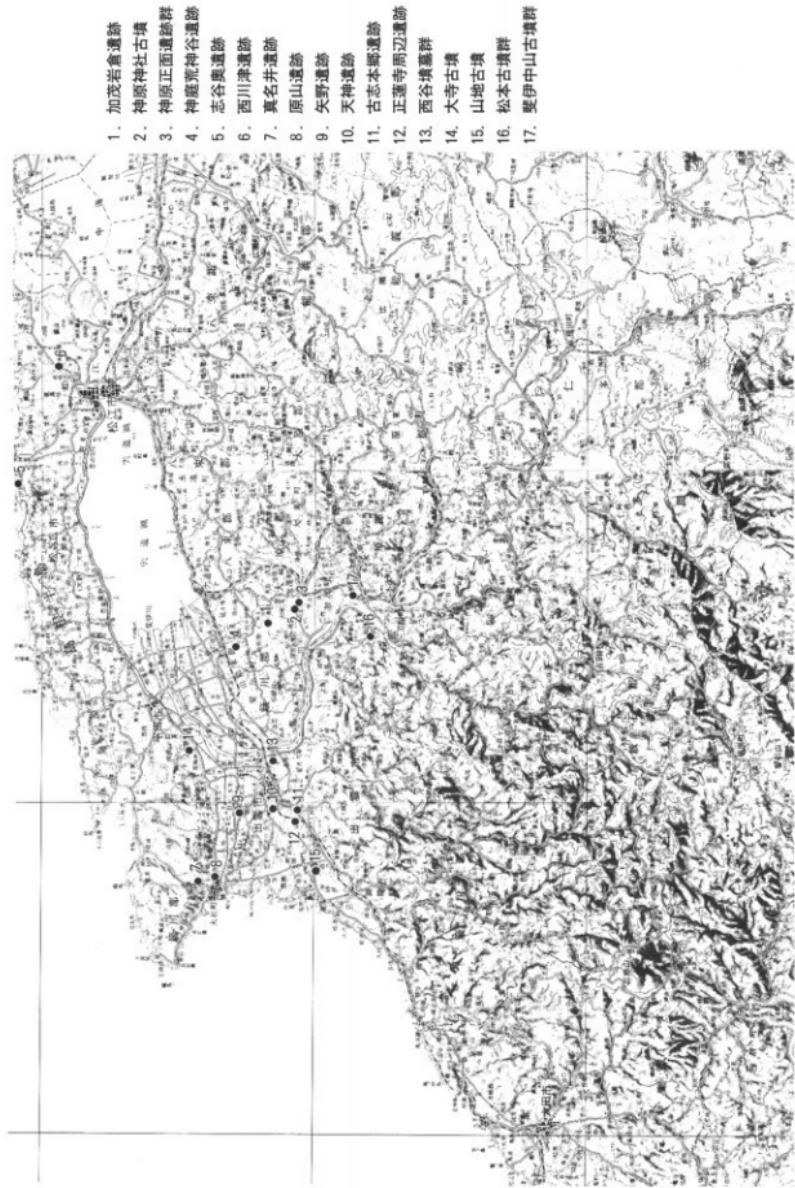
田中義昭・渡辺直幸ほか『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学考古学研究室1992

三宅博士・田中義昭『荒神谷遺跡－古代出雲の「王国」を求めて－』1995



第4図 加茂岩倉遺跡とその周辺 (S = 1:50000)

第5図 出雲地域の主要遺跡



第3章 調査の概要

1. 銅鐸埋納坑周辺の調査

農道新設のため法面工事を行っていた重機により、南に張り出した丘陵尾根筋にあたる南東・南西斜面の標高 146 m から 136 m 付近が掘削され、丘陵中腹には高さ約 2 m、大きさ 8×15 m の不整形な残丘が残されていた（第3図）。銅鐸埋納坑（SK1）はこの残丘の北東側に、土坑（SK2）は銅鐸埋納坑から西 2.5 m の残丘のほぼ中央部にあたる位置で検出された（第6図）。銅鐸埋納坑（SK1）と土坑（SK2）との間では重機による削平が地山の花崗岩風化土まで及んでおり、攤乱土を除去すると茶褐色粘質土が薄く堆積して残っていた。そして、茶褐色粘質土層の下には SK2 から SK1 に向かって緩やかに傾斜する地山平坦面が造り出されていた。平坦面はちょうど銅鐸埋納坑（SK1）の北辺と土坑（SK2）の北辺を結ぶ辺りのラインで北側の丘陵基部に向かう傾斜が変換しており、この辺りで丘陵上方に傾斜が立ち上がっていたと考えられる。また、銅鐸埋納坑（SK1）の南西 1.5 m の位置には土坑（SK3）を、土坑（SK2）周辺に小ピットを検出した。

（1）土坑（SK2）

規模・形状（第7図）

土坑は北西側など重機によりかなり掘削を受けたところもあったが、銅鐸埋納坑（SK1）に比べると損傷は少なく坑の全体像がほぼ確認できた。土坑は地山の花崗岩風化土を掘り込んでつくられており、規模は坑の上面で $2.4 \text{ m} \times 1.3 \text{ m}$ 、底面で $3.0 \text{ m} \times 1.6 \text{ m}$ 、深さ 0.45 m を測る。土坑の掘削で特徴的なのは壁面をオーバーハングさせて掘っている点である。丘陵基部側にあたる坑の北側から北西側にかけては、北側で約 40 cm 前後、北西部の最も深いところで約 80 cm 近くを横掘りし、坑断面は上面よりも底面が広い袋状を呈する。この掘削方法は銅鐸埋納坑にもみられた特徴である。坑の北辺は掘り方の輪郭にほぼ沿って重機による掘削を受け、北西側はこの袋状になった坑の大井部が重機の掘削により失われていた。そのため、当初北西部は別の坑ともみられたので、かなり細かく畦を設定して上層観察を行ないながら埋土を掘り進めた。しかし、埋土に切り合いの関係もみられず土層が連続していることや、横掘りした坑の天井部が北側から北西側に続くこと、土坑底面の北辺も一直線状につながることなどから、横掘りした坑の大井部が重機によって削り取られた跡と考えられ、一つの坑であると判断された。東側から南東側にかけては坑の上面より底面が狭い一般的な坑の掘り方で掘られているが、さらに、その東側に $0.4 \times 0.5 \text{ m}$ 、深さ 0.2 m の方形状の坑が付随するような形で二段掘り状に掘られている。

埋土（第8図）

土坑上面は標高 138 m 前後の高さまで重機により削平されていたため、地山や埋土の上を覆っていた土層は削られて確認できなかった。土坑内の埋土は赤褐色粘質土と黄褐色砂質土が互層状にほぼ水平に堆積していた。銅鐸埋納坑内の埋土も暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の互層になっており

共通する特徴である。色調は銅鐸埋納坑の暗褐色粘質土の方が土坑の赤褐色粘質土より多少暗い感じがする。ただ肉眼観察では、土坑埋土は銅鐸埋納坑と同様に丘陵周辺で見られる土と同質のようにみられた。土層観察からは掘り返した痕跡は認められず、土坑東側に付随する坑まで埋上層が連続し、部分的には横掘りした坑の奥にまでこの2色の上の互層がみられた。互層が最も顕著な坑の中央部分では、厚さ0.5～1.5cmの赤褐色粘質土層と3～10cmの黄褐色砂質土層がそれぞれ交互に6～7層堆積していた。この互層が自然堆積か人為的なものかであるが、自然堆積によりできたとすれば、坑が埋まるのにかなりの時間を要し、その際には互層間に腐食土を挟んだり、砂粒の粒子に大小の変化がみられると考えられる。しかし、そうした状況はみられなかった。おそらく意図的に2色の土を使い分け、交互に丁寧に積んで埋めたと考えられる。ただ、土層断面の観察や互層を面的に剥がしながらの面的調査からは層を突き固めたような痕跡までは確認できなかった。なお、土坑内の埋土は銅鐸埋納坑の調査と同様に、縦、横、深さを10cm間隔により土壤のサンプリングを行なったため、面的調査は部分的にしか実施できていない。

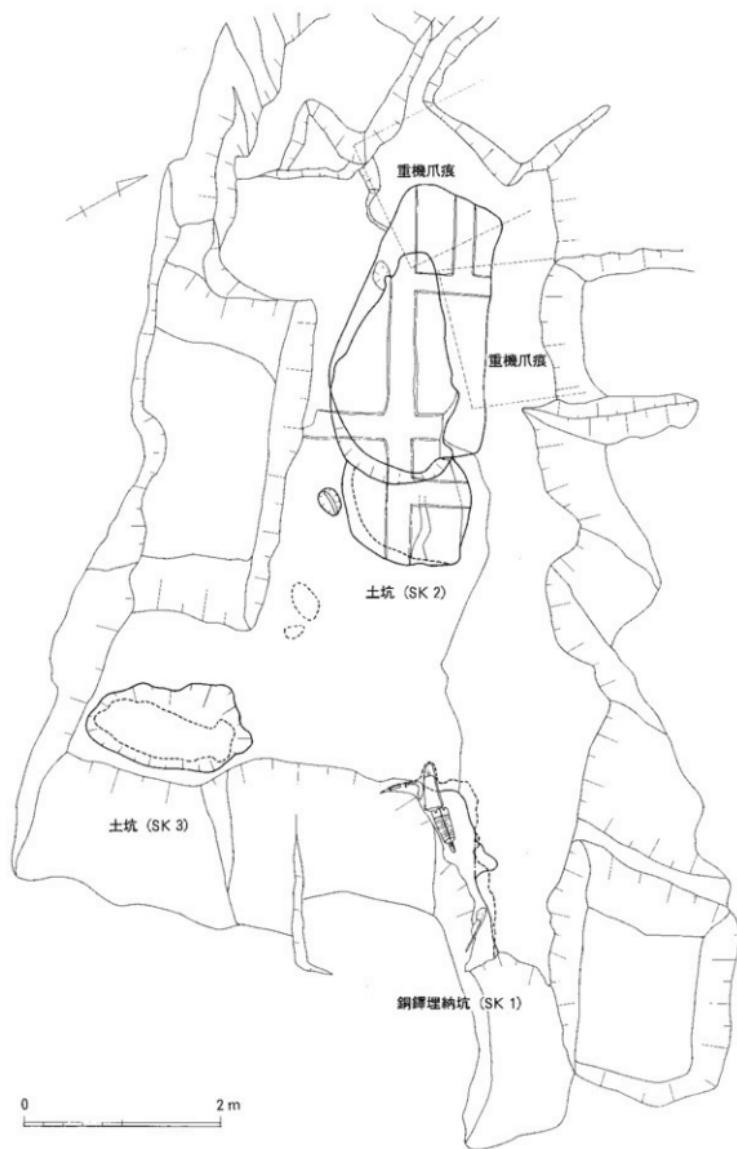
また、埋土内には豆粒大の炭化物が散在して見られたが、有機質の土壤などは確認されなかった。

遺物は坑内から全く出土しなかった。中央の土層観察用畦内は発掘を行なっていないので遺物が存在する可能性は否定できないが、昨年度行った金属探査でもこの周囲において金属反応はなく、地下レーダーによる畦上からの透視でも埋蔵物の反応はなかった。

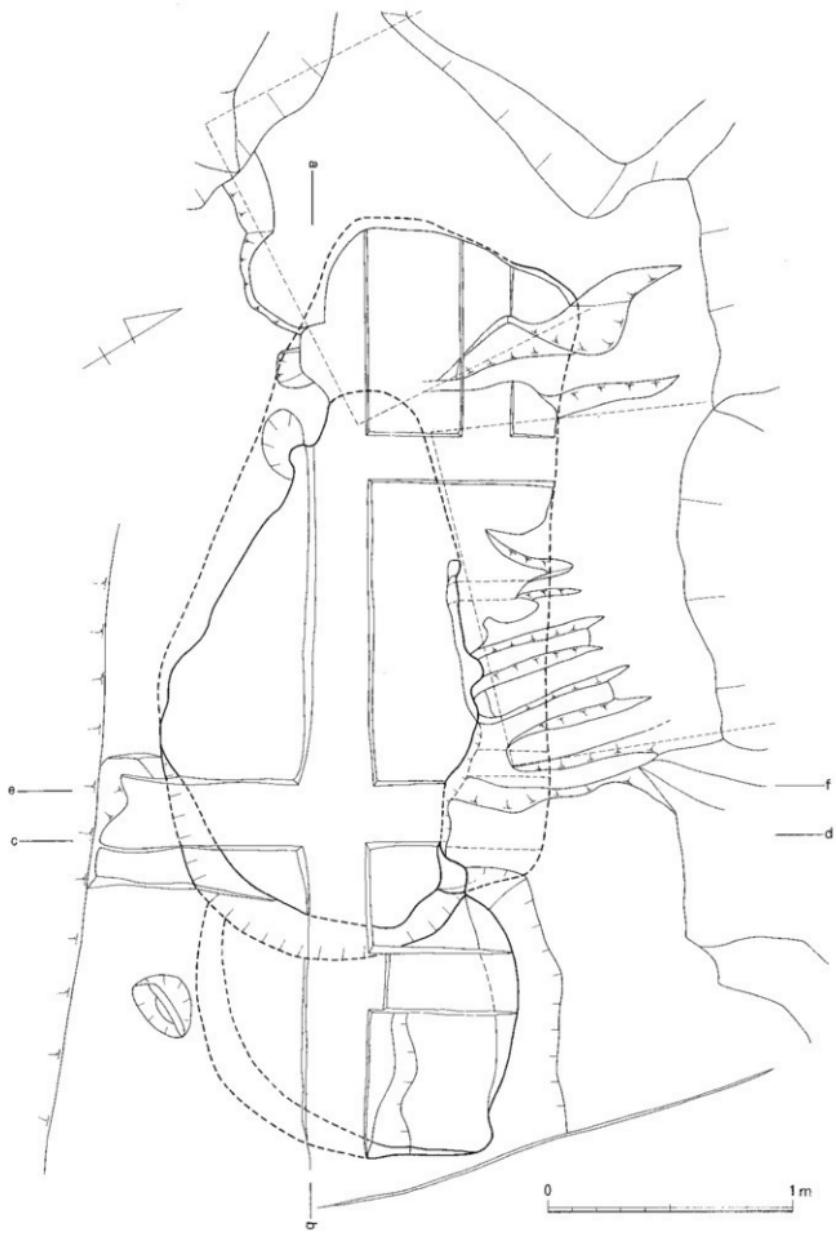
(2) その他の遺構

埋納坑の南西約1.6mに土坑(SK3)が検出された(第9図)。坑の平面は不整な長方形状を呈する。規模は長さが1.5m、幅は0.75m、底面の長さ1.4m、幅は0.1～0.4mを測り、深さは0.55mである。この付近は昨年度の調査で表土がわずかに残存していることが確認され、写真測量に入れるために掘り残していたところである。しかし、表土を取り除いてみると重機による掘削は土坑の底面までは達していないものの、かなり深いところまで攪乱を受けていた。このことから、昨年度の調査の段階で残存していると考えた表土も攪乱されたものと判断される。残存する埋土は上層に暗褐色土が下層に黄褐色土が堆積していた。坑内から遺物は出土していない。

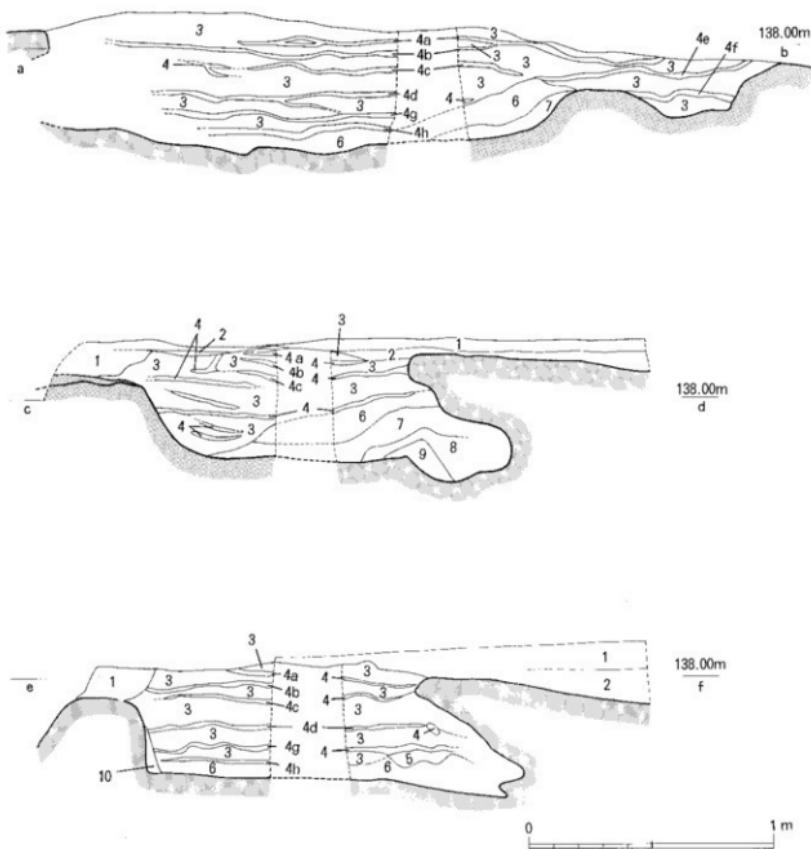
また、土坑(SK2)周辺に小ピットがいくつか検出されたが、穴の形状も不整形であり、柱穴などその性格を決定できる状況ではなかった。



第6図 遺構配位置図 ($S = 1:50$)

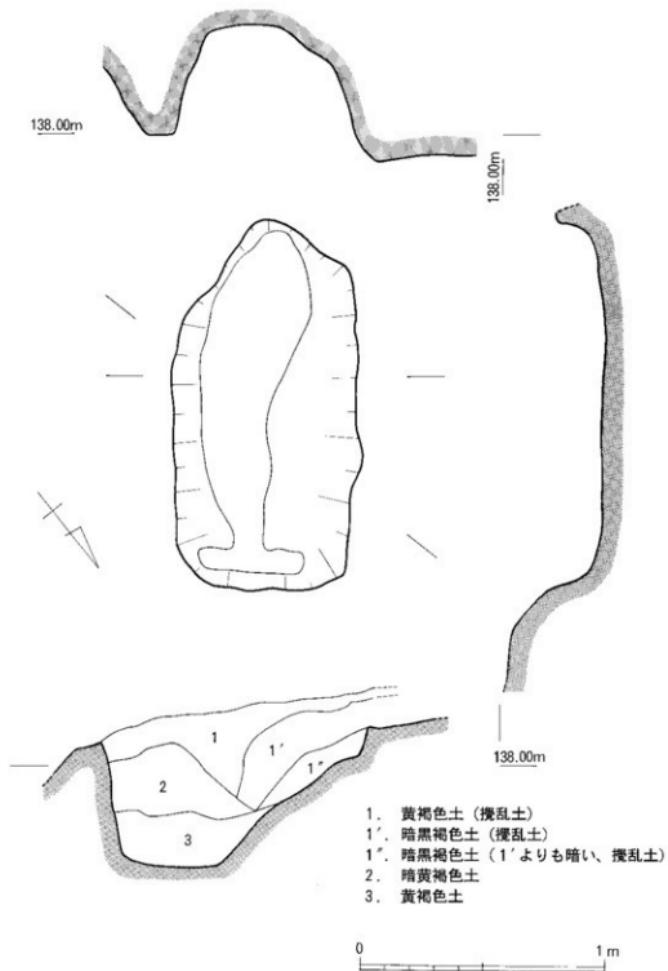


第7図 土坑（SK 2）実測図 ($S = 1 : 20$)



- 1、白色砂（擾乱土）
 2、白色砂、赤褐色粘質土ブロックを含む暗茶褐色粘質土（擾乱土）
 3、黄褐色砂質土
 4、赤褐色粘質土
 5、白色砂、赤褐色粘質土ブロックを含む淡褐色砂質土
 6、赤褐色粘質土ブロックを含む暗褐色砂質土
 7、白色砂、赤褐色粘質土ブロックを含む淡黃褐色砂質土
 8、白色砂、赤褐色粘質土ブロックを含む淡褐色砂質土
 9、白色砂、赤褐色粘質土ブロックを含む淡赤褐色粘質土
 10、赤褐色粘質土
 (4層のアルファベットは各セクション図に対応)

第8図 土坑（SK 2）土層図（S = 1 : 20）



第9図 土坑（SK 3）実測図 ($S = 1 : 20$)

2. 丘陵上の調査

銅鐸出土地の上方の丘陵上には1/1000の地形図や踏査によって平坦地が存在することが確認された。雑草木の伐採後の地形観察では、平坦地は北西から南東方向に延びる丘陵尾根の自然地形に沿って3段に削平地形が連なり、丘陵先端北東側斜面にも一段低い位置に平坦面が確認され、山城を形成する郭遺構と考えられた(第3図)。また、本丘陵の北東には、同じ山塊から西に派生する丘陵上に3段5連の郭をもつ大谷城跡(現在は消滅)が所在することから⁽¹⁾、大谷城跡を形成する一連の郭遺構と考えられた。しかし、この削平地に銅鐸埋納に関連する遺構が残存する可能性も考えられるので、この内丘陵先端部に位置する第3郭について地形測量を行ない、幅1mのトレンチを尾根に沿って中央に1本、尾根に直行するトレンチを2本設定して試掘調査を行なった(第11図)。

(1) 郭遺構

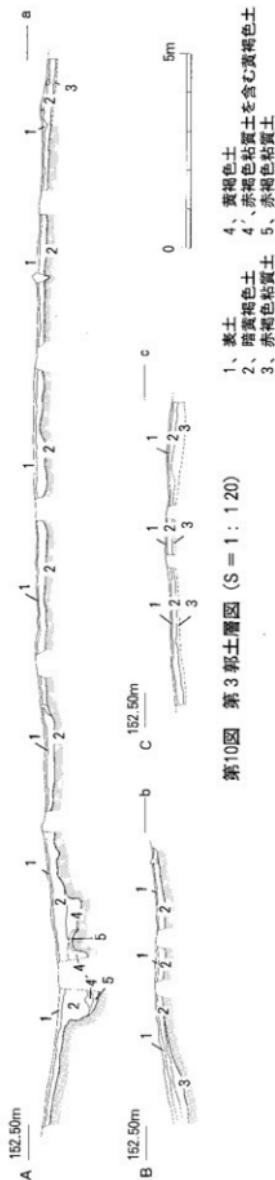
第1郭は標高約154.3～155mの丘陵尾根上にある郭で長さは27m、幅は3.5～6mと細長い平坦面である。第2郭とは約1.2mの段差がある。

第2郭は第1郭と第3郭の間にある郭で、長さ3m、幅5.5mの小規模な半円状の平坦面である。

第3郭は標高約152mの丘陵突端部に位置し、長さ24m先端側で幅8m、奥側で幅4mの細長い平坦面である。基本的な土層の層序は、表土の下に暗黄褐色土層、その下は赤褐色粘質土(真砂土)の地山となっている。丘陵突端部では暗黄褐色土層の下に赤褐色粘質土がみられ、地山を削平した土を盛土して平坦面を広げているのが確認された(第10図)。郭中央部にあたるT-3・T-4の表土及び暗黄褐色土層中には炭化物が混在する個所があり、細片であるが数十点の土師質土器片が出土した。しかし、郭に伴う建物遺構などは確認できなかった。

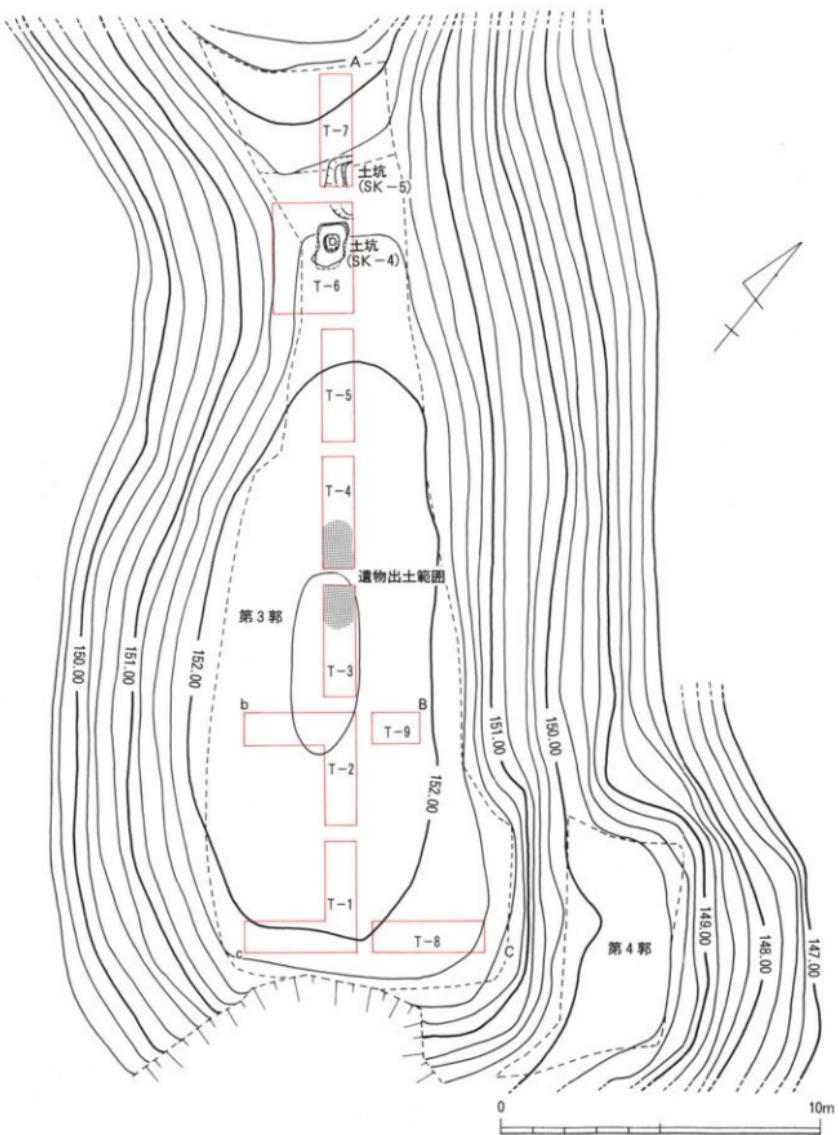
第4郭は第3郭の突端北東側の約2m下にある郭で、長さ4m、幅6～8mの小規模な台形状の平坦面である。

遺物は、第3郭の表土及び暗黄褐色土層中から出土した土師質土器のみである。細片であるがいずれも浅い小皿とみられる。この内実測が可能であった5点を掲載する(第12図)。

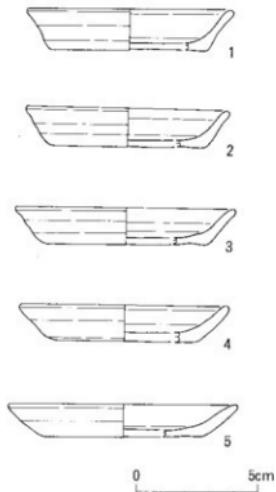


第10図 第3郭土層図 ($S = 1 : 120$)

1. 淡土
2. 暗黃褐色土
3. 赤褐色粘質土
4. 黄褐色土
5. 赤褐色粘質土



第11図 第3・4郭地形測量図 ($S = 1 : 150$)



第12図 出土土器実測図 (S = 1: 2)

がる。底部の切離しは不明である。胎土は微砂粒を含み、淡橙褐色を呈する。

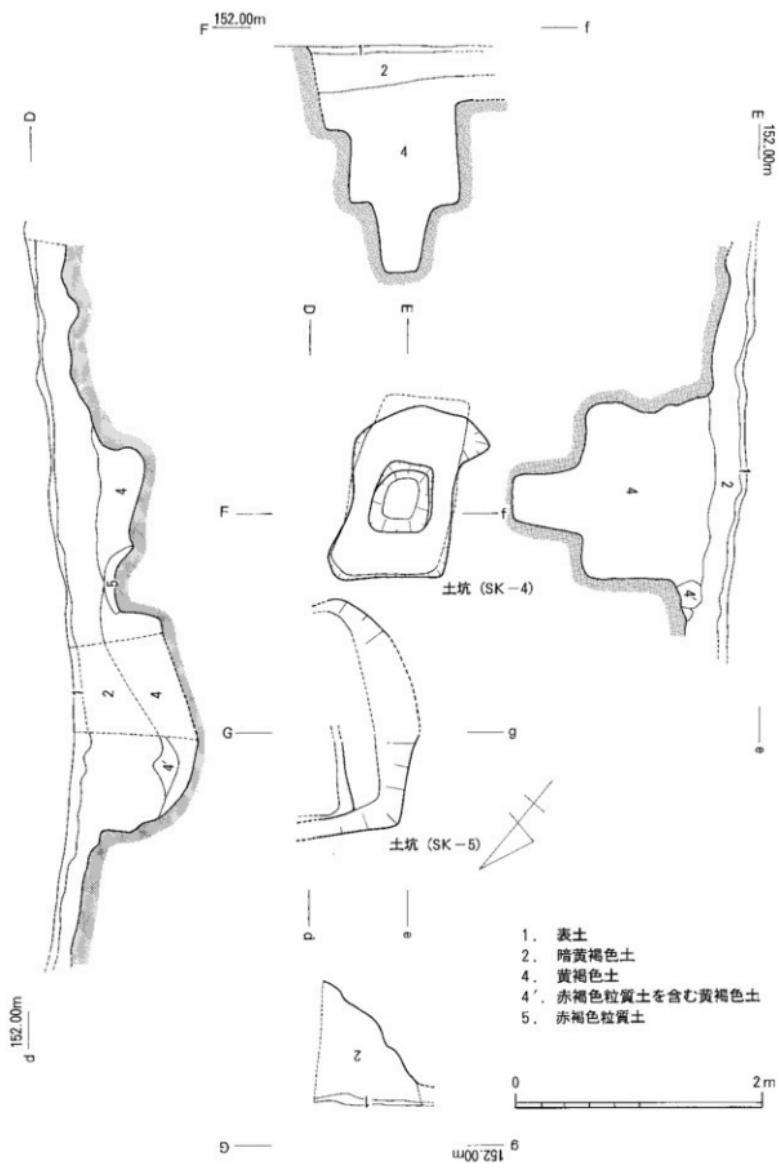
一方、近接する大谷城跡については、昭和57年に行われた発掘調査により、口径9cm前後、高さ1~1.5cmの七輪質土器の小皿や中国製の陶磁器、古錢が出土している。この内土師質土器は本調査により出土した土師質土器と非常に類似していることから、ほぼ同時代のものとみられ、今回調査した郭遺構については、同一丘陵上に所在するという立地状況などを勘案すると大谷城跡を構成する郭群の一部と考えられる。なお、大谷城跡は出城的なもので、出土した陶磁器から16世紀後半に位置づけられ、文献等から穴道氏に由来する遺構とみられている。

(2) 落とし穴状土坑 (SK 4) (第13図)

第3郭北西側に2基の土坑 (SK-4・5) を検出し、その内SK-4についてはトレンチを拡張して完掘した。

土坑 (SK-4) は尾根筋にあたる標高151.6mで検出した。長さ1.5m、幅0.8mのほぼ長方形を呈し、床面までの深さは1.0mを測る。坑はほぼ垂直かややオーバーハングさせて掘られている。床面のほぼ中央には長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.6mのビットが真下に向けて掘られている。埋土としては黄褐色土が堆積していた。遺物は伴わなかったが、形態から考えて縄文時代の落とし穴であると考えられる。土坑 (SK-5) については、長さ2.0m、幅0.7m以上、深さ0.8mを測るが、完掘していないので詳細については不明である。

(1) 蓮岡法暉「加茂・大谷城跡」『鳥取県埋蔵文化財調査報告書 第X集』 島根県教育委員会 1983



第13図 土坑 (SK-4・5) 実測図 ($S = 1:40$)

第4章 まとめ

加茂岩倉遺跡の第2次調査では、銅鐸埋納坑（SK1）周辺に土坑2基が検出された。その内土坑（SK2）からは遺物は出土しなかったが銅鐸埋納坑に類似する特徴をもつものであった。また、丘陵上の試掘調査では、銅鐸の埋納に関係すると思われる遺構は確認されなかったものの、4段からなる郭跡を検出、上層質土器が出土した。その他、土器を伴っていないがその形態から縄文時代と思われる落とし穴が確認された。

土坑（SK2）について

土坑（SK2）と銅鐸埋納坑（SK1）は同一平坦面に隣接し、その規模や横掘りするという掘り方、砂質土と粘質土を互層にする埋土の堆積状況など、類似する特徴をもっている。一方、最大の相違点として、SK1には銅鐸39個が一括埋納されたのに対し、SK2からは遺物が全く出土しなかったことである。このような土坑（SK2）の性格をとらえることは、遺物の山上がなく類例にも乏しいこともあり、非常に難しいと言わざるを得ないが、あえてその性格について若干触れてみたい。

土坑の特徴のなかで特に注意されるのは、埋土が黄褐色砂質土と赤褐色粘質土との互層になっていたことである。ほぼ水平に堆積し腐食土等も挟んでなかったことから明らかに人為的なものと考えられた。互層にする意味については、地質学的には坑の中に水が染み込みにくくなるという防水効果のためとされる⁽¹⁾。だとすれば上坑内に何かが埋まっていると思われるが、金属反応がなかったこと、地下レーダーの調査から大きな埋蔵物はないこと、土層に落ち込みが見られないことなどから、土坑内に埋まっているとすれば、①「布か木などの薄平たい有機物が埋められた」と考えられる。しかし、調査では土坑底面などに有機質の土壤などその痕跡は確認できていない。また、中央部分に残した畦内に存在する可能性もあるが、坑を3×1.6mの大きさで、しかも0.8mという手を精一杯伸ばして届くぎりぎりの辺りまで横掘りした部分を使用せず、遺物を中央部分のみに埋納しているのも不自然と思われる。

次に何も埋まっていないと想定した場合には、②「何かを埋める目的で坑を掘ったが、埋める段になって、予定のもの（例えば銅鐸）がなかった」、③「隣接する二つの坑に交互に埋めていた結果、最終的には銅鐸埋納坑の方の坑に銅鐸が埋まり、土坑の方は空となった」という土中保管説、④「当初から何かを埋める目的もなく坑を掘り、意図的に何も埋めずに空のまま埋めもどした」などが考えられる。しかし、②については、掘り返した土を無造作に埋め戻していないことから、予定外となつたので単に埋め戻したとは考えにくい。③については、両坑とも銅鐸を掘り返したという痕跡もなく、掘り返したとすれば、横掘りした坑の奥にいたるまで坑の内部全体をクリーニングしたことになる。そして、銅鐸を移し替えた後、空となった坑であっても銅鐸を埋納する坑と同様に白い砂と赤い粘土とを意図的に使い分けて丁寧に互層にして埋めたことになる。また、④についても、銅鐸を埋納する坑とは別にわざわざ坑を掘り、白い砂と赤い粘土とを使い分けて丁寧に互層にして埋め戻したことになる。仮にこのようなことが想定されるならば、互層にして埋めるという

行為そのものに何か特別な意味があったと考えられ、互層という埋上状況は祭器とされる銅鐸の埋納に際して行われた祭祀あるいは儀式的な行為の現れであるかもしれない。

このように、遺物が出土していない土坑（SK 2）の性格を考えることは容易ではなく、想像の域を出ないが、埋納坑と土坑は近接する位置にほぼ主軸を描えていること、残念ながら、先後関係は不明であるが同一の平坦面から掘り込まれていること、坑の形状と大きさ、土坑の掘削方法、埋土の堆積状況などが類似あるいは共通していることから、偶然に場所を隣にして坑が掘られたとは考えにくく、少なくとも二つの坑はなんらかの相互関係をもち意識して掘られ埋められたものであると考えられる。

放射性炭素年代測定について

銅鐸埋納坑（SK 1）と土坑（SK 3）間の地山平坦面上に堆積していた茶褐色粘質土層中から採取した炭化物（試料：SK 1外）と、土坑（SK 2）埋土内から採取した炭化物（試料：SK 2内）について、（株）地球科学研究所に依頼して放射性炭素による年代測定を行った。両方とも豆粒程度の炭化物が散発的に分布した状況であったため、採取した炭化物をそれぞれにまとめて試料とし、それでもなお試料が少量だったのでAMS法（加速器質量分析法）により測定を行った。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。結果は次のとおり弥生時代の範疇に収まる年代が示された。

| 試料名 | 試料種 | ^{14}C 年代 | $\delta^{14}\text{C}$ | 補正 ^{14}C 年代 | 曆年代 |
|-------|-----|--------------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------|
| SK 1外 | 炭化物 | 1990±50年BP | -26.3 | 1970±50年BP | 交点AD55年 |
| | | (BC90~AD10年) | | (BC70~AD30年) | 2シグマ BC50~AD135年 |
| | | | | | 1シグマ BC 5~AD90年 |
| SK 2内 | 炭化物 | 2140±50年BP | -26.6 | 2120±50年BP | 交点BC150年 |
| | | (BC240~140年) | | (BC220~120年) | 2シグマ BC350~300年 BC215~5年 |
| | | | | | 1シグマ BC190~50年 |

以上、今回の発掘調査により、第2の土坑の検出や放射性炭素年代測定結果など銅鐸埋納の意味や時期を解明する上で貴重な一資料を得ることができたことは大きな成果であった。しかし、不明な点も数多くあり、他遺跡との比較検討など今後の課題としまとめに替えたい。

(1) 山内靖喜氏のご教示による。

図 版

図版 1-1



大 岩

図版 1-2



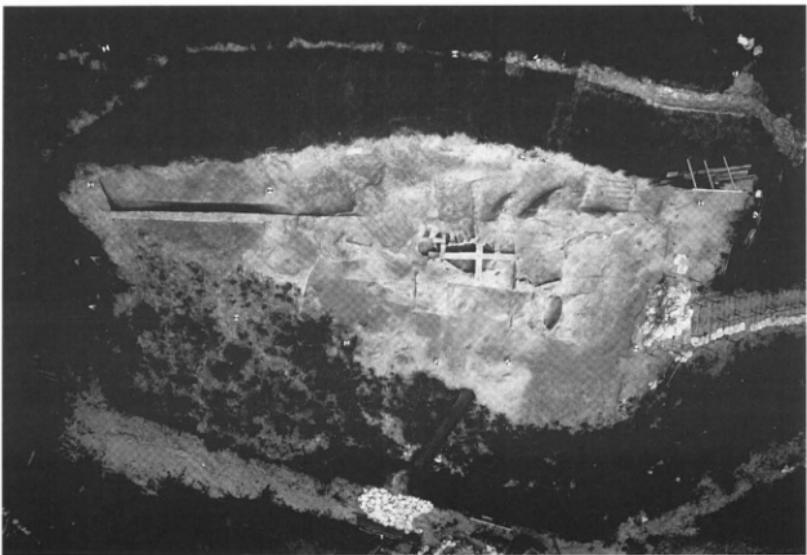
權現（矢櫃神社跡）の大岩

図版 2-1



遺 跡 近 景 (南西より)

図版 2-2



遺 跡 全 景 (真上より)

図版 3-1



土坑（SK 2）周辺調査前（北より）

図版 3-2



土坑（SK 2）周辺調査後（北より）

図版 4-1



土坑（SK 2）調査前（東より）

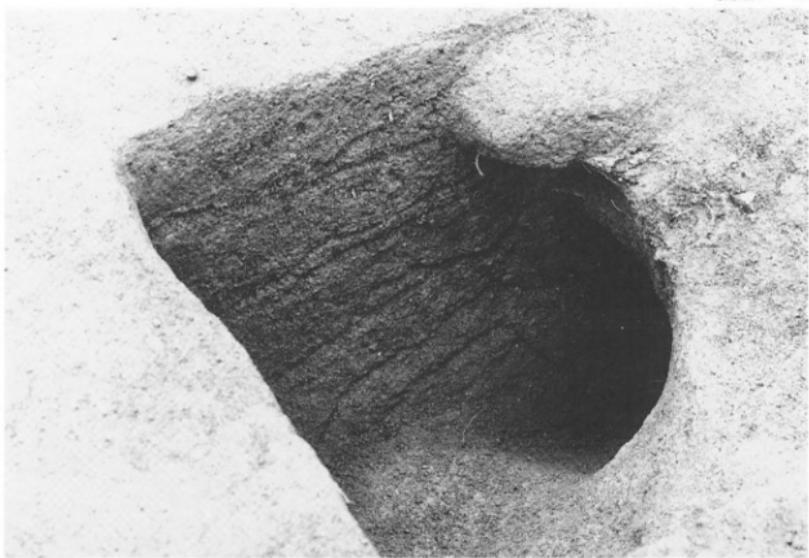
図版 4-2



土坑（SK 2）調査後（東より）



土坑（SK 2）土層断面



土坑（SK 2）土層断面

図版 6-1



土坑（SK 3）土層断面

図版 6-2



土坑（SK 3）（西より）

図版 7-1



丘陵上調査前（北西より）

図版 7-2



丘陵上トレンチ（南東より）

図版 8-1



落とし穴状土坑 (SK 4) 土層断面

図版 8-2



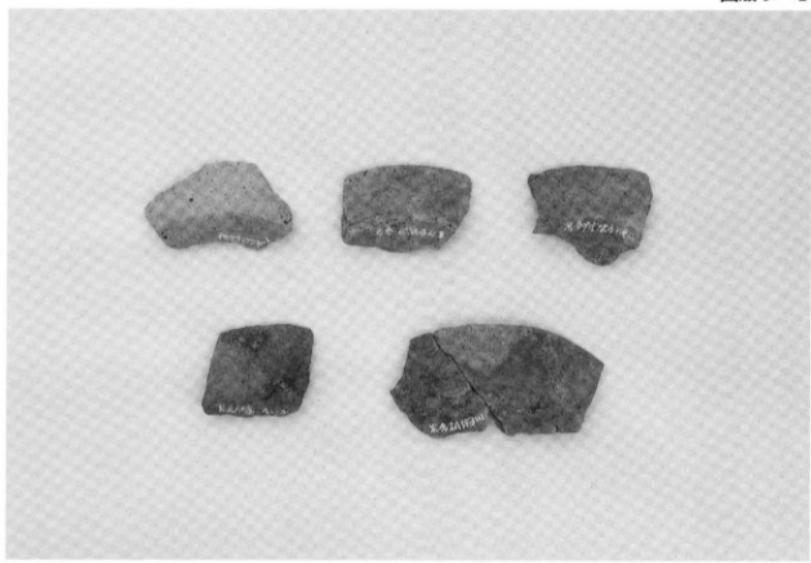
落とし穴状土坑 (SK 4) (北西より)

図版 9-1



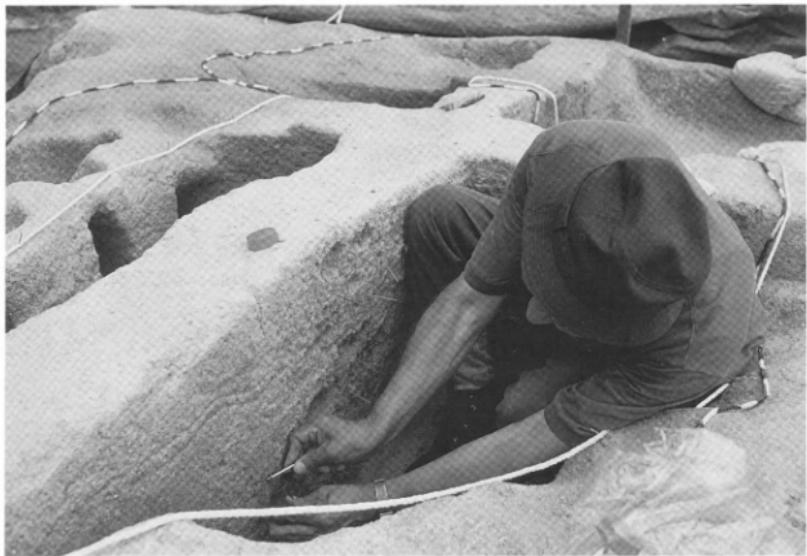
土器出土状況

図版 9-2



出土土器

図版10-1



埋土試験採取

図版10-2



現地説明会(1997年10月19日)

報告書抄録

| ふりがな | かもいわくらいせきはっくつちょうさがいほう II | | | | | | | |
|----------------|--|------|-------------|-------------------|---------------------------------------|---------------|------------------------|------|
| 書名 | 加茂岩倉遺跡発掘調査概報 II | | | | | | | |
| 編著者名 | 吾郷和宏 | | | | | | | |
| 編集機関 | 加茂町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒699-1105 島根県大原郡加茂町大字字治303 TEL0854-49-8510 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1998年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査時期 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| かもいわくら 加茂岩倉 | しまねけん おおはらぐん かもちょう 島根県大原郡加茂町 おおあざいわくらあざみみなみがさこ 大字岩倉字南ヶ廻 | | 32362 | 35度 21分 24秒 | 132度 53分 9秒 | 199705～199803 | 400 | 補助事業 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 加茂岩倉 | 銅鐸埋納地 | 弥生時代 | 銅鐸埋納坑 土坑 | 銅鐸39個 | 銅鐸の埋納坑および埋納状況を確認。 銅鐸埋納坑と類似する土坑を検出。 | | | |
| | 山城跡 | 中世 | 郭 | 土師質上器 | | | | |
| | | その他 | 落とし穴状土坑 | | | | | |

加茂岩倉遺跡発掘調査概報 II

発行 平成10年3月

編集 島根県加茂町教育委員会
島根県大原郡加茂町大字字治303

印刷 (株) 報 光 社
島根県平田市平田町993